

# 田植歌に見る石見方言のモダリティ形式

船木礼子（橋本礼子）

## 1. 田植歌を方言研究に用いる目的

田植歌は田植神事や田植作業（労働）で歌われた伝統的な歌謡である。田唄とも呼ばれる。これらの歌謡が記された本を田植本あるいは田植草紙とも言う。本稿では田中（2013）を参考に、これらを田植歌、田植本と呼ぶことにする。広島県山県郡大朝町枝宮に伝わる一田植本が「田植草紙」として1928年に『日本歌謡集成 5』に翻刻、掲載されたことから「田植草紙」が知られるようになり、各地の田植本の発見や研究が進んだという（田中2005：110）。1950年代以降に安芸、備後、備中などを中心に田植本の発見と翻刻が積み重ねられ、『田唄研究』や『中世文芸』などに矢継ぎ早に掲載されていった。これらの田植歌は農村に伝承される田植えにまつわる神事と労働に関わる歌であることから文学、民俗学などの立場からの研究が多いが、山内洋一郎氏による中世日本語の観点からの分析も有名である（山内1962、1963、1965、1967）<sup>1</sup>。

田中瑩一氏は山陽側（安芸、備後、備中）の田植歌の研究が厚く、山陰側（石見・出雲、伯耆）が手薄との認識から、山陰側の田植歌の研究に着手し、歌の構成などから各地の特色を明らかにしようとしている（田中2005：110-119）。歌の構成については、中国地方東部（出雲・伯耆・備後・備中地域）ではダシとツケのまとまりが連鎖して一連の叙事内容が歌い上げられる（その一連を「ナガレ」という）詩型が一般的であるのに対し、西部（石見・安芸地域）ではオヤウタとコウタの2行でひとまとまりの意味内容を示し、この掛け合いを2、3回繰り返したあとオロシと呼ばれる第3行目以下の歌唱に移る詩型だという（なお「田植草紙」はこのオヤウタ・コウタ、オロシ構成の中国地方西部の特徴を持つ）。これらの中間部（石見東部・安芸東部地域）では、東部の「本節」の詩型と西部の「オヤウタ・コウタ、オロシ」の詩型の両方が混交した状態であるという。さらに西部西端部（石見西部地域）では、ネリウタの部分とオオウタ・ヒキウタの部分からなる詩型で、オオウタ・ヒキウタの部分はオヤウタ・コウタ、オロシ一行構成の田植歌と同じだという（pp.118-119）。これらから分かるのは、東西に長い島根県一帯で、田植歌の詩型は異なる部分と共通した部分とが少しずつずれながら存在しているという、グラデーション状の分布状況である。詩型にみられるこうした地理的分布の特徴は、ことばの上にも存在する可能性がある。

もう一つ、筆者自身の関心のことも述べる。筆者は近年、石見地方の方言のモダリティ表現やその形式、とりわけ古典語の「らむ」由来の形式「ロー」が現在も使われる同地域

で、どのような意味・機能で「ロー」が使われ、他形式とどのような意味・機能の分担をしているのかに関心を持っている。現在の方言については、調査によってある程度明らかにできるが、過去にどのような姿であったのかわからない。地方の方言文献は多くなく、石見地方については江戸期以前のはなかなかない。そのような中で、彦坂（2005、2012）は「田植歌」および「石見方言茶話」を方言の意志・推量形式や格助詞の分析に用いている。田植歌は口承の歌謡であること、書写の時期やリテラシー上の問題（用字・仮名遣い）、他地域の歌謡との交渉を含む混質性、中世から近世の中央語史と方言史の関係など、複雑なところが多く、一筋縄ではいかない扱いにくい資料である。しかし、彦坂（2005）も「とにかくこの資料の整理から出発するしか方法がない」「たとえ時間的な長さを含む状況であっても、その整理によって何か向こうから語りかけるものがあるのではないか、そういう立場から出発してみたい」と述べるように、問題点には一定の配慮しつつ、少なくともこのような事象が田植歌のなかにあるということを把握することはできると考える。

そこで本稿では、「田植草紙」の系列ではあるが部分的に異なる諸本のうち、中国地方西部、石見地方の田植歌のことばを詳しく見ることにする。様々な田植本があるが、本稿では上記のような関心から、石見地方のものとして田中（2005）が校訂本文および影印を掲載している新宅屋本「歌乃雙紙」と、『中世芸芸叢書6 田植唄本集』に翻刻が掲載されている「青笹上大江子本田唄集」を資料として、これらの資料上に現れている石見方言のモダリティに関わる形式群について検討していきたい。

## 2. 田植歌に見られる文法的特徴 —先行研究より—

まずは山内（1962、1963、1965、1967）の指摘をまとめておく。氏の一連の研究によると、広島県山県郡新庄付近より見出されたものと伝えられる「田植草紙」の文法的特色について「中世色の濃いこと」を示す次のような特色を挙げている。

- ・バ行マ行四段の音便は全く室町時代のまま
- ただし促音便は少ない（歌謡に不向きなせいかとの指摘あり）
- ・「う」「らう」「べい・べし」「じ」「まい」などが用いられる（「よう」は未発生）
- ・否定の「ばや」（他本では「まい」や「ざる」になっているとのこと）
- ・否定の「いで」が単なる否定だけでなく反語で多く使われる
- ・敬語では「お-ある」「まいする」など

「近世」の特色として次の点を挙げている。

- ・開合・四つ仮名の乱れの甚だしさ
- ・一段化例が二段より多い

- ・仮定法の「たら」「なら」などの使用
- ・命令法に「い」語尾をとる2種のものがある
  1. 命令形+い（四段動詞打つ「打てい」）
  2. 四段・ナ変の未然形+い（「買わひ」）、その他の動詞+さい（「見さい」）
- ・並列の「し」（「まい」「う」以外に付く）
- ・準体助詞「の」が一例見える

時代は特定していないが、次のような特色も指摘している。

- ・断定の「じゃ」「だ」「んだ」が用いられる
- ・「やら」が軽く疑う、また不定のまま言い置く意で文中の句に用いられている  
「やろ」が推量し疑う意で文末に用いられ、「にやあらん」の原義を保っている
- ・接続助詞の「が」、「けに」が用いられる
- ・否定辞「ぬ」が主に用いられるが「の」もある

彦坂（2005）は「田植草紙」を用いて中国地方の意志・推量表現を観察し、『方言文法全国地図』（GAJ）の言語地理学的解釈で得られる相対的な言語史と重ね合わせて、

- ・「うず」が「田植草紙」には見られない（GAJには痕跡程度）
- ・「田植草紙」では推量に「らう」が用いられ、形容詞では「う」が使用される傾向がある
- ・意志表現には用言+「う」が用いられ、一（二）段活用動詞を中心とした類にも拗長音化が起こっていないと考えられる（従って「よう」の分化もない）
- ・一（二）段活用動詞を中心とした意志表現のラ行五段化は「田植草紙」にはない

などを指摘している。このうち、「うず」が見られず「らう」がある点について、国語史上は「うず」が「らう」よりも長く続く点を指摘し、この矛盾については方言内での動向が問題だと述べている。

また彦坂（2012）では「石見方言茶話」と「田植歌」を用いて中国地方の格助詞「の」と「が」の使用状況を検討している。田植歌については『新日本古典文学大系62』所収の田植草紙を用いている。これによると、連体格は「の」が圧倒的に多いのに対して、主格は「が」が主、主格の「の」は限られた用例のなかでいうと連体修飾節内での使用が主になっていて、近代語と似た機能分担状況であることを報告している。尊卑については、主格では中世中央語のような主格「が」の卑下表現は明確でないが、主格「の」は尊敬に傾いているとみなせること、ただし主格「の」の用例は少ないため、かつての尊卑区分を引き継いでいるだけだとの考えを示し、「が」と「の」については尊卑の表現を残しつつも、格や構文といった文法的機能の分担が前面に出てきているという結論に至っている。

このように、田植歌に記録されたことばという限定的な資料のなかではあるが、用いられていることばを中央語史との関係の中で論じ、文法的な特徴をあぶり出すことがなされ

てきた。「田植草紙」は写本の成立年代が不明であるため時期の扱いが難しいが、写本に書写年代が書かれている場合はもう少し複雑さが減ずるといえそうだ。本稿で取り扱う新宅屋本「歌乃雙紙」と「青笹上大江子本田唄集」は、それぞれ1817（文化14）年、1825（文政8）年の書写だということなので、少なくともそれ以前の成立で、書写時期の言語を反映させた部分も可能性としてあるとみることができる。

ただ、そうはいっても田植歌のことばは歌謡のことばである点、そして農村で作られた書（写本）だという点で、言語資料として扱う際には注意も必要である。まず歌謡のことば、とくに農村での田植えという行事の祝祭歌かつ労働歌であるために、詞章の構造や内容は伝統に縛られるだけでなく、リズムや繰り返し、声をよく延ばしたり響かせたりするのに都合のよい音になるように語が選ばれたり改変されたりすることがあり得るだろう。語義未詳の部分も多い。また一方で、古びた語などについては自分たちに理解できるように改変されることもあり得ると思われる。中には、宮崎神社神職で長くサンバイもつとめておられた藤川柳太郎氏の言のように、意識的な改作が行われ、また自作の田植歌も流布していたとの情報もある。（『中世文芸叢書6 田植唄本集』p.177、「田うゑ哥写」解説より）。

こういったことを考えると、古いことばをそのまま伝えている部分と、書き手や歌手手の感覚や解釈で改変した部分とが渾然一体となっている資料である点に気をつけて扱っていくべきだろう。

### 3. 本稿で用いる田植本

本稿では、島根県石見地方の方言を反映していると考えられる、石見地方に伝わる次の2つの田植本を分析対象とする<sup>2</sup>。書誌情報は田中（2005：164-166）および田唄研究会編（1966：178-181）による。

「青笹上大江子本田唄集」（『中世文芸叢書6 田植唄本集』所収のものを使用）<sup>3</sup>

1825（文政8）年書写か。島根県邑智郡石見町日貫青笹、上田隈一氏蔵（屋号「上大江子（うえおえご）」）。上田隈一氏は永く同地のサゲ（音頭取り）をつとめ、田植唄伝誦の中心にいた方だという（『中世文芸叢書6 田植唄本集』p.179解説より）。

『青笹上大江子本田唄集』は、牛尾三千夫氏により『邑智郡誌』（1937年）、および私家版30部限定本（1938年）に翻刻が掲載されたという。

以下、慣例に従い「青笹」と略す。

新宅屋本「歌乃雙紙」（田中2005所収の翻刻・影印を使用）

1817（文化14）年書写。島根県邑智郡石見町中野横見、小笠原威若氏蔵（屋号「新宅

屋」）。『山陰地域研究（伝統文化）』1（1985年）にも田中瑩一氏の翻刻が掲載されている。校訂本文は文字や語などの修正がなされているが、影印で原本の表記を見ることができる。

以下、田中（2005）に従って「新一」と略し、田中氏による校訂本文は（校訂）と示す。

なお論じるに当たって「田植草紙」も参照することがある。本稿では友久武文・山内洋一郎校注（1997）「田植草紙」（『新日本古典文学大系62』所収）を用い、特に「青笹」の内容を理解するための補助として対応する詞章があるときは「田植草紙」も並記することにする。以下、「草紙」と略す。

#### 4. 「青笹」「新一」に見られるモダリティ形式の特徴

「みやすて」（簡単で）、「がご」（ひこばえ）などの俚言、原因理由の「けに」、否定辞の「の」、格助詞「い」などに中国地方方言の特徴が見える田植本であるが、筆者が興味を持っている推量・意志・勧誘・命令などに関わる表現では「青笹」「新一」のなかでどのような形式がどう使われているのかを、有標形式（助動詞など）ごとに詳しく見ていく。

##### 4.1. 「うず」

彦坂（2005）が疑問を呈していた「うず」は、「新一」には用例と思われるものが1例だけあった<sup>4</sup>。「青笹」にはない。下線は筆者による（以下同）。

（1）「新一」はん／＼とさかへかこひかるふすをは（歌番号39、影印22オ）<sup>5</sup>

（校訂）ばん／＼と裂かば裂け 恋しからうものをば（校訂本文p.207）

校訂本文では有久本<sup>6</sup>に従って「恋しからうもの（者）をば」されているが、影印では（1）の通りで「こひ（し脱）かるふすをば」と読める。眞鍋（1974）には歌謡番号103番（pp.809-810）に諸本のこの部分が列挙されていて、それを見ると「恋しからうものをば」系と「恋しからうものやれ」系、「恋しからう殿をば」系があるようだが、「新一」はどれとも異なっていることになる。

「うず」の表記が「ふす」となっていることについては、オ長音や拗長音であるためか意志や推量の「う」の表記は「う」だけでなく「ふ」も多いことから、「ふす」の表記も不自然ではない。

意味の面でも、オヤウタ「鼓うちをこゆふよりかたのつきをせふなれ」の後にコウタとして「はん／＼とさかへかこひかるふすをは」が続くので、「さかへか」とは未詳だが、校訂本文や「草紙」の注釈などに沿って考えると「鼓打ち（の人）を恋うより肩の継ぎを

しよう」「バンバンと（一部未詳）恋しかろう（人）をば」といったことになろうか。一人称者以外の者が恋しく思うことを想像（推量）する表現、あるいは仮の話、非現実事態を描いていると解釈できそうである。またこうした意味での「恋しかろうずをば」だとすると、「うず」はモノ的な準体句で使われていることになる。

#### 4.2. 「らう」

古典語の「らむ」由来の「らう」（ろう）は、「新一」には2例、「青笹」は0例だった。なお「つらう」「たらう」などはなかった。

- (2) 「新一」つゆにぬれてハかるろふ山の。さゝくさ（歌番号12、影印14ウ）

（校訂）露に濡れては 刈るらう山の笹草（校訂本文p.198）

- (3) 「新一」露をはろふてつむろ寺の。とふ茶を（歌番号27、影印18ウ）

（校訂）露を払うて 摘むらう 寺の唐茶を（校訂本文p.203）

彦坂（2005）も用いた「草紙」では「らう」9例（形容詞カリ活用連体形＋「らう」1例、「つろう」1例、「たらう」1例を含む）なので、これと比べると本稿で扱う2資料ではかなり「らう」が少ない。

「新一」の用例はどちらも文末に位置する述語用法で、動詞形に付いている。形容詞後接の例は無かった。「新一」「青笹」ではたとえば「すごい」などのように形容詞連体形の音便形が終止機能を担うものもあるが、そういった終止の形容詞に「らう」が付く例もない（これは「草紙」も同様）。なお後述の「う」との違いとして、名詞修飾の例もないことを指摘しておく。

意味の面では、文脈のわかりやすさに考慮して田中氏による校訂本文で示すと、(2)は「今朝疾うの殿ばらは 馬に乗り連れてな／草刈りにござるやら 馬乗りを連れてな／なにと草刈り 無うては山を迷うた／なにと殿御は さようつ山を迷うた／露に濡れては 刈るらう山の笹草」と続き、「殿ばら（殿御）」を主語とした現在推量と考えられる。

(3)は「宇治の茶山の茶園を 今朝見たれば／新葉が開いて さも良い摘みごろ／なにと はじめに 御門の脇の茶摘ませう／なにと 娘に 九ぼんの鉢で茶摘ませう／なにと 御寺の唐茶は露になび（い）た／露を払うて 摘むらう 寺の唐茶を」（（い）は原本にない文字の補足）と続き、これも「娘」が主語の現在推量と解釈できる。「つらう」「たらう」が無いことも踏まえると、「新一」で用いられた2例の「らう」は、どちらも古典語「らむ」と同様に、歌詞世界の現在時制のなかで推量もしくは非現実を表すものだと考えられる。

「草紙」で「らう」だった部分は、「新一」「青笹」でどうなっているか。(4) (5)のように異なるモダリティ形式に置き換わっている例もある。(4)は伝聞または推測の「そうな」、(5)は「う」に置き換わっている。

- (4) 「新一」きのうきたさうなよはりまのなわてをよ (歌番号126、影印40ウ)

(校訂) 昨日来たさうなよ 播磨の縄手をよ (校訂本文p.228)

「草紙」けふくるろうよ 播磨暇をな (歌番号74、p.30)

- (5) 「青笹」露ヲはろうてつもうやてらの (p.115、歌番号42、21ウ)

「草紙」露をはろふて摘むろう 寺の新茶を (歌番号10、p.6)

ほかの「らう」は、対応する句がないか、例えば (6) (7) のように認識のモダリティとしては断定になっているかであった。

- (6) 「青笹」京くるけにのふはりまなわて二のふ (p.155、歌番号187、66オ)

「草紙」けふくるろうよ 播磨暇をな (歌番号74、p.30)

- (7) 「青笹」なにとくさかりのふてハ山まようた (p.154、歌番号186、66オ)

「草紙」くさかりがのふては 山をまよふろう (歌番号76、p.31)

#### 4.3. 「う」

「らう」が少ない分、意志・勧誘・命令だけでなく推量でも古典語の「む」由来の「う」の使用量が多いようである。「新一」・「青笹」とともに「う」が多数用いられている。

まずは形容詞に「う」が後接する例を見る。彦坂(2005)も指摘する通り、状態を表す形容詞は「う」でも意志等の意味にはならず、推量の専用形式を必要としない。そのため当資料でも形容詞+「ウ」によって推量等を表す例が多いのは自然である。述語用法も名詞修飾用法もある。

- (8) 「青笹」しめ上てかい(た)ならみちも早かろうぜ (p.116、歌番号49、23ウ)

※「た」脱

- (9) 「新一」風か吹ならすすしかろふかせふけ (歌番号106、影印36ウ)

(校訂) 風か吹くなら 涼しからう風吹け (校訂本文p.224)

「草紙」吹くなら すんずしかろふ風ふけ (歌番号40、p.18)

主語が無情物である場合の「う」も推量あるいは非現実事態を表すと解釈される。これも述語用法、名詞修飾用法のどちらもある。(12) (13) のようにコト的準体句で使われ「が」で後続名詞に係る句もある。なおこの「照ろうがための」の歌は諸本の多くに共通する詞章である。

- (10) 「新一」暫<sup>しば</sup>しうへされあひ<sup>つけ</sup>附花がさこふぞ (歌番号178、影印52オ)

(校訂) しばし植ゑされ あひつけ花が咲かうぞ (校訂本文p.242)

- (11) 「青笹」よいすみ酒ならこへもたわや五で (p.128、歌番号86、36ウ)

「草紙」こへもたおやぐ よい清酒の折にわ (歌番号32、p.15)

- (12) 「新一」けさのくもりハてろふかための。雲よ (歌番号11、影印14オ)

(校訂) 今朝の曇りは 照らうがための雲よ (校訂本文p.198)

- (13) 「青笹」けさのかすみのてろうが為の (p.111、歌番号29、17オ)

「草紙」朝のくもりは てろうがためのくもりか (歌番号2、p.3)

また「じ」と対比的に用いた(14)(15)もあった。事実ではない仮想の話、非現実の事態として「生る」「生らない」を述べるのに「う」と「じ」が使われているが、多くの本に共通する詞章なので、古い形を伝承している部分だといえるだろう。

- (14) 「新一」なろふならじハ花にといたまいや (歌番号102、影印35ウ)

(校訂) 生らう生らじは 花に問ひたまへや (校訂本文p.223)

- (15) 「青笹」なろうならしわ花にといたまい (p.136、歌番号118、45ウ)

「草紙」なろう ならじは 花にといたまへ (歌番号34、p.16)

主語が三人称の有情物(生物含む)の場合も推量や非現実事態の意味に解釈される。

(16) では90番歌の文脈から船頭や舟子ら一行が主語だと考えられる。疑問の「か」との共起例である。(17)(18)は主語が鮎(「あい」「愛」)である。コト的準体句で使われる(19)のような例もあった。現代では「見るより」とするところだが、非現実事態を描く際に「う」が生起しており、古典語の「む」に近いといえる。ただし、(殿御が)「ふくおさつかりもとるぞほんのわがやへ」(「新一」歌番号157、影印46ウ、校訂本文「福を授かり 戻るぞ 本の我が家へ」(p.235))のように、思念の上で主語の人物「殿御」が「戻る」ことを想定した表現でも「う」なしで表されることもあるので、「う」による非現実事態の標示は義務的なものとまではいえない。

- (16) 「新一」<sup>はりま</sup>播磨<sup>な</sup>だへハはる／＼とふいかつこふか (歌番号90、影印33オ)

(校訂) 播磨灘へは はる／＼遠いが 着かうか (校訂本文p.220)

- (17) 「新一」登<sup>ノボル</sup>やる下<sup>くだ</sup>るやら鮎<sup>あい</sup>か三つゝれてな

せにいろふやせにすもふやふちハけにいすやれ (歌番号121、影印39オ)

(校訂) 上るやら下るやら 鮎が三つ連れてな

瀬に入らうや 瀬に住まうや 淵はけにいすやれ (校訂本文p.227)

- (18) 「青笹」登<sup>のぼ</sup>らくたるやら愛<sup>あい</sup>三ツつれでな

せんとやせにすもうやヲうし川にこすな (p.135、歌番号117、45オ)

「草紙」のぼるやら下るやら 鮎が三つつれでな

瀬いろう せにすむ 淵へはいらいで (歌番号62、p.26)

- (19) 「青笹」人のふりヲ見よよりそてのふりヲ見やれ

袖のふり見よよりあいけふなへヲ植され (p.142、歌番号141、52オ)<sup>7</sup>

反語での「う」の使用もみられる。主語は有情物で、意志動詞に「う」が付くが、疑問詞や疑問の係助詞、否定の構文「～いでは～ばや」などによって、反語であることが判るようになっている。



- (20) 「新一」とふらハとふれかしたれかむころふにや (歌番号139、影印43オ)

(校訂) 通らば通れかし 誰が婿に取らうにや (校訂本文p.231)

- (21) 「新一」夫をてんでにからいてハ何<sup>なに</sup>をてん手二かるふか (歌番号133、影印42オ)

(校訂) それをてんでに刈らいでは 何をてんでに刈らうか (校訂本文p.230)

- (22) 「新一」それおてんでうとめてハ何をてんでにとめうはや (歌番号113、影印37ウ)

(校訂) それをてんでに尋めいでは 何をてんでに尋めうはや (校訂本文p.225)

次に意志(表出)、申し出、勧誘、命令など意味に解釈できる、対人的なモダリティの表現に用いられた「う」について見ていく。ただ、歌詞世界で想定される一人称者や二人称者については語用論的解釈に幅が生じ、明確には分けられないことがある。また語義未詳の語句や誤記と思われるものなどもある。そのため、ここでも用例の数の全体像ではなく、典型的な例を示すことにする。

- (23) 「新一」われニきせふとてけふそりかさを。かふたそ (歌番号135、影印42オ)

(校訂) われに着せうとて京反り笠をかうたぞ (校訂本文p.230)

- (24) 「青笹」我にやろうぜげによい種ヲ (p.134、歌番号112、43ウ)

ここでの「われ」「我」は「お前」の意味であり、(23) (24) の「う」は意志だと解釈できる。終助詞「よ」「ぜ」「ぞ」などが後接していることが多い。なお、もちろんのことだが動詞終止形のみで意志を表現していることもある。また、田植歌という共同作業のための詞章なので、(25) (26) のように勧誘とも、仮定条件を受けての一人称者(複数)の意志表明ともとれるものもある。

- (25) 「新一」ちりもあらハのもふよわれらかのもふよ (歌番号97、影印34ウ)

(校訂) (酒に) 塵も有らば 飲まうよ 我らが飲まうよ (校訂本文p.221)

- (26) 「青笹」かこかさくならまこうや福の種 (p.134、歌番号112、43ウ)

「草紙」がごがさし候 げに千本<sup>ちもと</sup> このいねにわ

まかうや 福の種をば (歌番号64、p.27) ※「がご」は「ひこばえ」の方言

聞き手に利益をもたらす行為を話し手が表明するタイプを「申し出」とすると、田植歌は神事でもあるため(27)のように神や「さんばい」などに差し上げる意の「まいらせう」「参せふ」等の例が非常に多い。また(29)のような、物を売る売り声(客寄せの声)と理解できるものもある。申し出と解釈できるものは「う」で表されており、現代語の「さしあげます」「売ります」のように「う」を使わない表現は当資料にはないようだ。

- (27) 「新一」なんとわさなへまつさんはい。参せやふ (歌番号1、影印9ウ)

(校訂) なんと 早稲苗 まづさんばい (に) 参らせう (校訂本文p.193)

- (28) 「新一」そへてしんじふあのしおはまにやくしおはまのふ (歌番号74、影印30オ)

(校訂) 添へて進ぜう あの塩浜に 焼く塩浜のう (校訂本文p.216)

- (29) 「新一」太刀うろふや／＼さやもない太刀うろふ (歌番号154、影印46オ)

(校訂) 太刀売らうや／＼ 鞘もない太刀売らう (校訂本文p.235)

「青草」たち売や／＼やさやもない立うらう (p.150、歌番号171、61ウ)

「草紙」太刀うろう／＼と 鞘もないたちうろう (歌番号88、p.35)

命令と解釈できる例もあり、この点も古典語の「む」と同様と言える。

(30) 「青笹」治郎らも多郎らも笠買って参レ

わろうらもかさいらハ買てまいらしよやれ

我にきせとて大仙かさヲ (p.139、歌番号128、48ウ)

「草紙」の類歌(歌番号55)のように「わろうら」が二人称であるなら、「買てまいらしよ」は命令と解釈できる。ただし、田植歌では全体的に、命令表現はほとんどが動詞命令形や授受動詞俚言形「ござ」の命令形「ごせ」、あるいは「見さいや」「着やれ」といった動詞連用形に「なされ」「やれ」等が後接していると思われるもの、さらにその縮約・音訛形と思われる「笠ヲばろくにきや」(「青笹」p.127、歌番号85、36ウ)のような動詞連用形+「や」などが使われる。<sup>8</sup>

#### 4.4. 「べし」

古典語の「べし」由来の形式も、「新一」2例、「青笹」5例と少ないが、使われている箇所が存在する。

(31) 「新一」おなりわやあれとこまておくるへしせきふとう山 (歌番号99、影印35オ)

(校訂) おなりは やあれ どこまで送るべし 関う遠山 (校訂本文p.222)

(32) 「新一」せき山せきてらハもろすミのほうへをくるへし (歌番号99、影印35オ)

(校訂) 関山関寺は 室積の方へ送るべし (校訂本文p.222)

(33) 「青笹」をなりわやれとこ迄送ルへじかじか嶋 (翻刻p.153、歌番号181、64オ)

(34) 「青笹」をなりわやれとこ迄送ルへじ太じか嶋 (翻刻p.154、歌番号183、65オ)

「草紙」うなりおばどこまでおくるべし かちが島へ (p.29、歌番号71)

(35) 「青笹」おなりわやれとこ迄送りへじ石山 (翻刻p.153、歌番号182、64ウ)

「草紙」うなりおばどこまで送るべし 関山 (p.14、歌番号31)

(36) 「青笹」じしろのかたばら夜にきべ物やれ (翻刻p.159、歌番号203、70ウ)

「草紙」地白の帷子は 宵に着べいものやれ (p.50、歌番号126)

(37) 「青笹」けせ早乙女も夜にきべ物やれ (翻刻p.159、歌番号203、70ウ) ※「けせ」は傾城これらから、「べし」については次の2点が指摘できる。

「青笹」には (33) (34) (35) に「べし」由来と思われる形式が使われているが、述語用法では伝承歌謡でありながら「へじ」となっていることから、この写本の時点でこの地域での「べし」は混乱している、あまり使わない形式であったのではないかと考えられる。

「新一」では「べし」が少ない。「青笹」では「へじ」となっている歌が、「新一」では、

- (38) 「新一」おなりハやあれとこ迄おくるかかしかしまい(歌番号155、影印46オ)

(校訂) おなりは やあれ どこまで送るか かしか島<sup>(イ)</sup>へ(校訂本文p.235)

のように、「べし」がなくなり、「どこまで送るのが適当か／当然か」といった適当・当然の意味が有標形式では示されなくなっている。また名詞修飾の場合も、「青笹」の「きべ物」、「田植草紙」の「着べいもの」は、「着るのによいもの」といった適当・当然の意味だが、「新一」では(39) (40)のように、「べい」ではなく「良い」になっている。

- (39) 「新一」地白<sup>じ</sup>のかたびらハよいにきよいものやれ(歌番号172、影印50オ)

(校訂) 地白の帷子は 宵に着良いものやれ(校訂本文p.239)

- (40) 「新一」傾城<sup>ケイセイ</sup>めあてによひにきよいものやれ(歌番号172、影印50オ)

(校訂) 傾城目当てに 宵に着良いものやれ(校訂本文p.239)

これらから、少なくとも「新一」「青笹」の書写時期、「べし」類は普段のことばではなくてきており、「へじ」のように語形が不安定になったり、「良い」のように意味をはっきりと捉えられる別語に言い換えたりすることが行われていたと言えるだろう。

#### 4.5. 「まい」

古典語の「まい」由来の形式も、「新一」6例、「青笹」7例ある。「まい」「まへ」「まひ」の表記に加え「まあ」「ま」などの表記もあり、後者は現在の中国地方方言の「マー」を想起させる。「まあ」「ま」の例は少ないが、(41) (42)のようにどちらも述語用法であり、名詞修飾用法では(43) (44)のように「まひ」「まい」であった。なお、「まじ」「まじい」はない。付言すると、「じ」もほとんど使われておらず、確例は(14) (15)、このほかには「青笹」に「鳥がとまら<sup>じ</sup>こうかがねぶる」(p.163、歌番号219、75ウ)があるだけである。

意味では、(41)のような否定推量、(42)のような否定意志・勧誘が確認できる。(43)は主語「早乙女」の「添うつもりのない人」「添わないだろう人」などと解釈できるので、三人称者の意志の推量というべきか。また述語用法だけでなく(43) (44)のような名詞修飾用法もある。

- (41) 「新一」次郎らも太郎らもけいこせずはかなふ<sup>ま</sup>あ(歌番号41、影印22ウ)

(校訂) 次郎らも太郎らも 稽古せずはかなふまあ(校訂本文p.207)

- (42) 「青笹」まとかまつ<sup>ま</sup>かきよ森様のこさる (p.117、歌番号50、24オ)

- (43) 「新一」皐月をもしろ添<sup>ま</sup>ひ人に添てゆく(歌番号175、影印51オ)

(校訂) 五月 面白 添ふまい人に添うて行く(校訂本文p.241)

- (44) 「青笹」すの内わねこへなようでやる<sup>まい</sup>物 (p.120、歌番号60、28オ)

「草紙」声を聞いたが まだ巢の内やろ 寝声な (p.6、歌番号9)

## 5. まとめ

石見地方の方言を反映した田植本を検討することによって、次のことが見えてきた。まず、資料によって、「らう」や「べし」などの使用状況はかなり違いがあることが分かった。現代の石見方言ではラム由来の形式「ロー」を推量、とりわけ確認要求表現でよく用いるが、本稿で検討した2つの田植本では「らう」は少なく、「う」の使用が主であった。「べし」については語形が不安定になったり他の語に置き換わったりしており、今回扱った資料ではすでに「べし」が衰退している様相が見て取れる。

また、たった1例ではあるが、「うず」の痕跡が見つかった。隠岐や北陸にも「うず」由来の形式があるので（例えば新田2018）、関連を見ていく必要があるだろう。

「まい」の述語用法（主節末）と名詞修飾用法（連体用法）との違いをみると、少ない例の中でのことだが、縮約形・音訛形とみられる「まあ」「ま」などの形は述語用法で現れていた。本稿で扱った資料だけでは例が少なく、検討できなかったが、従属節内で判断のモダリティを義務的に示すことがなくなる時期との関係や、従属節に古い形式が残るやすく、主節末ではより新しい、変化した形式が取り入れられやすいといった傾向との関係など、すべて今後の課題としたい。

## 注

- 1 山内洋一郎編（1967）『田植草紙 校訂本文ならびに総索引』（田唄研究別冊）は、『田植草紙』（山本信哉博士所伝本）の二種の転写本（東京大学国語研究室本と同資料編纂所本）のうち東京大学国語研究室本を底本として、校訂本文および索引を作成している。この底本は広島県山県郡新庄付近より見出されたものと伝えられ（p.113「あとがき」より）、日本古典文学大系『中世近世歌謡集』に翻刻されたものと同じである。

校訂の方針によると、1.仮名遣い、3.宛字・送り仮名、4.濁点・読点については校訂を行っているが、2.特殊な撥音や音訛形はそのままだという。

また、校訂において参考にした諸本（主なもの）は次のものだという。（略称・書名・書写時期・掲載誌・地域）

高松古本	高松屋古本	田唄集	享保頃	中世文芸叢書6	広島県山県郡大朝町新庄
雑紙	田植歌雑紙		文政9	中世文芸叢書6	広島県山県郡千代田丁壬生
双紙	田植大哥双紙		弘化2	中世文芸叢書6	広島市稲荷町

写 田うゑ哥写 文政2 中世文芸叢書6 広島県安佐郡安佐町鈴張  
 由来記 田植由来記并植哥 明治26 国文学攷22号 広島県山県郡芸北町橋山  
 金井坐本 田植歌之巻 寛政13 田唄研究7 島根県那賀郡金城町波佐  
 これらを見ると校訂には広島県側の資料が多く参照されているといえそうである。

- 2 このほかにも、諸氏による精力的な翻刻、注釈が積み重ねられている。田中（2005：317-322）のリストを見ると、東部地域伝承（備中、備後、伯耆、出雲）、中間部地域伝承（石見東部、安芸東部）、西部地域伝承（Ⅰ～Ⅳ）、西端部地域伝承（石見西部）、その他（周防）の資料が、資料番号1～92を付されて挙げられている。本稿で扱う田植本2冊はともに西部地域伝承のⅣに分類されるもので、「青笹」は86、「新一」は83の資料番号が当てられている。他の西部地域、西端部地域のもの今後参照したい。
- 3 田唄研究会編（1966）『中世文芸叢書6 田植唄本集』広島中世文芸研究会の凡例によると、翻刻の方針は次のようになっており、方言研究にも有効だと判断した。  
 一、翻刻にあたっては、誤字・脱字・宛字・濁点など、できるだけ改めることをせず、原本に附された記号もそのまま残した。ただし、  
   イ 原本において改行があっても、それが一声であると判断できる場合は、翻刻においては一行に収める。  
   ロ 振仮名はそのまま残すが、振漢字の場合は、該当部分に○を附して脚注へ移す。  
   ハ 原本の誤字・宛字のうち通行文字にないものは適宜改める。（二以下は略す：筆者）
- 4 本稿の分析対象ではないが、1845（弘化2）年、広島市稲荷町の香浦巧氏蔵の「田植大哥双紙」にも「うず」が1例ある（推量）。  
 「京の町おとこぜいはかまたちにしやうづよ」（歌番号78、20ウ）  
 （『中世文芸叢書6 田植唄本集』p.62）
- 5 「／＼」は便宜的に踊字を示すこととする。以下同。
- 6 有久本『田植歌集』のこと。田中（2005：164-165）によると、山路興造氏翻刻『田唄研究』2、『日本庶民文化資料集成』5所収。1830（文政13）年。島根県邑智郡石見町中野森守（もりざね）、植田忠行氏蔵（屋号「有久」）とのこと。
- 7 「草紙」歌番号98を参照すると「あいけふなへ」は「愛敬苗」かとの説明があるが、それが何かは未詳。
- 8 「ゆうにめぐり鶯や花ちらかすな鶯」（「青笹」p. 157、歌番号198、69オ）など、「青笹」には連用形命令にも見える例がわずかにある。連用形命令の確例といえるか、検討が必要である。

## 参考文献

- 田唄研究会編（牛尾三千夫・友久武文・竹本宏夫・湯之上早苗編）（1966）『中世文芸叢書6 田植唄本集』広島中世文芸研究会
- 田唄研究会編（1972）『田植草紙の研究』三弥井書店
- 田中瑩一（1986）「中野・新宅屋本「田植歌乃双紙」一島根県邑智郡石見町田植歌資料（Ⅱ）」『山陰地域研究』2、pp.57-71 (<https://ir.lib.shimane-u.ac.jp/44833>)
- 田中瑩一（2005）『口承文芸の表現研究一昔話と田植歌一』和泉書院
- 田中瑩一（2013）「石見の田植草紙を読むー『田植草紙』との対照を通して」『国語教育論叢』22、pp.1-14 (<https://ir.lib.shimane-u.ac.jp/28488>)
- 友久武文・山内洋一郎校注（1997）「田植草紙」『田植草紙 山家鳥虫歌 鄙廼一曲 琉歌百控 新日本古典文学大系62』岩波書店
- 新田哲夫（2018）「石川県白峰方言と日本語史一推量意志の「うず」を中心に一」『日本語学』37-7、pp.12-24
- 彦坂佳宣（2005）「中国地方における意志・推量形式の方言史一GAJと「田植草紙」との比較から一」『日本語学の蓄積と展望』明治書院
- 彦坂佳宣（2012）「近世中頃の中国地方山間部における格助詞ノとガの用法一「石見方言茶話」「田植歌」の考察から一」『論究日本文学』96
- 眞鍋昌弘（1974）『田植草紙歌謡全考注』桜楓社
- 山内洋一郎（1962）「田植草紙のことば」『田唄研究』3
- 山内洋一郎（1963）「田植草紙の用語について」『田唄研究』4
- 山内洋一郎（1965）「田植草紙の語法二、三ーまいする・まんする・などー」『田唄研究』7
- 山内洋一郎（1997）「「こがね作りを買はいの」（田植草紙）をめぐってー敬意の「ーい」「ーさい」ー」『中世伝承文学とその周辺 友久武文先生古稀記念論文集』溪水社
- 山内洋一郎編（1967）『田植草紙 校訂本文ならびに総索引』田唄研究別冊

## 付記

本稿はJSPS科学研究費20H00015（基盤研究（A）（一般）、研究代表者：日高水穂）の研究成果の一部である。